2016. 6. 22　中日新聞

「難民支援 これからも」

ギリシャでの活動報告　高山日赤の白子医師

難民診療のため、ギリシャに約一カ月間派遣されていた高山赤十字病院の内科医、白子順子さん(五七)が二十一日、同院で現地での活動を報告した。海外派遣は八回目。「難民の状況は思ったより大変だと実感した。これからも支援を続けていきたい」と話した。（片山さゆみ）

花束を受け取る白子さん(右)＝高山市天満町の高山赤十字病院で

白子さんは、五月十八日～今月十六日に、ギリシャとマケドニア国境付近の難民キャンプで活動。シリアやイラクの内戦から逃れた人たちが、約二千五百人集まってテントで生活している。フィンランドとドイツ、日本の赤十字でつくる約二十人のチームの一員として派遣された。一カ所につき一日六十～百人を診療、往診した。

通訳はいたが、シリア語やアラブ語など多言語での会話に苦労したという。治療用のテントは応急処置や薬の処方しかできず、近くの病院に搬送することもあったが、ギリシャ語に対応できる人はいなかった。白子さんは「通訳でどこまで伝えられているか分からない。医療用語も難しく、言葉の壁を感じた」と振り返った。

テント近くの国連難民高等弁務官事務所（ＵＮＨＣＲ）の事務所で暴動寸前の騒ぎがあり、避難したことも。「災害と違い、難民支援は活動のゴールが見えない。今回の経験を広め、引き続き支援を続けたい」と話した。